



西尾ロータリー Weekly

第 2955 回例会 平成 31 年 1 月 22 日(火) 天気:曇 No.26

2018-19 年度テーマ



会長/ 鳥居祥雄 幹事/ 石川哲朗

クラブ会報委員 杉浦 広 / 永江義澄 / 三浦康彦

例会日: 火曜日 12:30 例会場: 西尾コンベンションホール B

事務局: 西尾市永楽町 3-45 西尾信用金庫中央支店内 204

TEL: 0563-54-7770 FAX: 0563-54-7050 URL: <http://www.nishio-rotary.org>

【本日のプログラム】

司 会 岡田雅彦例会運営委員長 齊 唱 「我等の生業」
 スピーカー 京都大学 霊長類研究所副所長 / 教授 (神経科学研究部門 統合脳システム分野) 高田昌彦様
 「パーキンソン病の克服を目指して」
 食 事 香村

〔会長挨拶〕



昨年 12 月、エアコンが 1 台動かなくなりました。普段は利用しない仏間でしたが、お寺さんのお参りには寒すぎる為、少しだけエアコンを利用します。修理しようか、新しくしようか悩む最中、隣に住む息子夫婦の居間のエアコンが、夏の猛暑に効きが悪く困ったという話を思い出しました。相談したところ、容量の大きいエアコンに変えたいということで、丁度良いので息子のエアコンを仏間に移し、居間に大型の新品を購入することに決まり、購入に出かけました。

販売員に事情を話すと、2 台買ったほうが良いですよ、と言われました。しかし、勿体無いので当初の予定通り 1 台のみ契約しました。後日、設置業者が調査に来て、再度同じことを勧められ、最終的には店の思惑通り 2 台購入することになってしまいました。2 台目のエアコンを探しに店に赴くと、息子が、仕事部屋が欲しいが、そこにはエアコンが無く、もう 1 台欲しいということになり、とうとう 3 台を一度に購入することになりました。年の始まりからえらい散財となってしまいました。

昨今、エアコンはどの部屋にも設置され、一年中快適な生活を享受しています。昔は団扇か扇風機で十分でした。家庭用電化製品は使用年数が決まっています。壊れたとき、修理をして使い続けることが自然のように感じますが、今は使い捨てるように新品に変えていくことに違和感を覚えます。

話は変わりますが、先日お客さんの賀詞交歓会が東京のホテルであり、出席してきました。5~600 人の参加者の中、終わり頃、立食の食事が大いに余り、非常にもったいないと感じて帰ってきました。

物があふれ、機械も道具も使い捨てる社会に矛盾を感じた最近でした。

〔委員会報告〕

〈出席委員会〉朝岡 正副委員長

本日の出席数 56 名

1 月 8 日のメイクアップ 21 名

訂正出席率 100%

〈スマイルボックス委員会〉本田正則親睦活動委員

鳥居祥雄君 3人目の孫(男子)が昨日生まれまし

食 事 「香村」



た。名前はまだありません。

石川哲朗君 高田昌彦様、今日はみんなが興味あるお話を聞かせていただけそうです。宜し

くお願いします。

小澤育史君 孫が帰りました。家内も私も、そして愛犬もいつもの生活に戻り平穏です。でも寂しいです。

山崎周彌君 神谷君のご厚意に感謝！

本多 淳君 新聞に載りました。

本田正則君 病気全快しました。前立腺癌の陽子線治療が終了しました。

〔卓話〕



京都大学 霊長類研究所副所長
教授（神経科学研究部門 統合脳システム分野）
高田昌彦 様

「パーキンソン病の克服を目指して」

本日は、大脳基底核の神経が壊れることで発症するパーキンソン病についてお話します。

パーキンソン病は、線条体で正常に分泌されるはずのドーパミンが減少することによって、脳深部にある大脳基底核全体の活動に異常が生じることが原因で発症します。ほとんどの脳の神経疾患は遺伝的要因で発症しますが、パーキンソン病は非常に珍しく、遺伝的素因よりも様々な環境因子が大きく関係します。遺伝的要因であるピュア遺伝子異常による発症はせいぜい 10%くらいです。発症年齢は20～80歳代と非常に広範囲で、進行にも大きな個体差があります。また、60歳以降で急増する疾患でもあります。パーキンソン病の発症率は人口10万人あたり100～150人ですが、60歳以降では100人に1人の割合となります。神経疾患ではアルツハイマー病について患者数が多く、全国の総患者数は約20万人に及びます。

パーキンソン病の主な症状として(1)手足が震える振戦、(2)筋肉や関節が硬くなる固縮、(3)身体が動きにくい無動、(4)姿勢を保つことが出来ない姿勢反射障害があり、特に振戦は安静時や静止位に目立ち、顎や舌にも見られます。進行性の運動障害がよく知られていますが、最近是非運動症状である自律神経症状や精神症状にも注目が集まっています。

克服するためには、基礎研究と臨床研究が密接に連携して効果的な治療法や予防法を開発する必要があります。通常はL-DOPAを使用した薬物療法を最初に行ないますが、進行してくると脳深部刺激術と呼ばれる外科療法が有効になります。また、今後はiPS細胞による移植治療や、ドーパミンを自動的に補充したり、ドーパミン神経の死滅を押さえたりする遺伝子治療が期待されています。



【ベネファクター】鳥居祥雄君